琉球大学学術リポジトリ

性役割発達および適応に関する研究（１） ― 沖縄の六才児に見られる性役割選択 ―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2011-04-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小橋川, 慧, Kobashigawa, Akira
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19149

性役割発達および適応に関する研究 (1)

——沖縄の六才児に見られる性役割選択—— 註1

小橋川 慧

1 緒 論

人格形成および発達の分野に於いて，心理学者による究明が殆んどおこなわれていない問題の一つとして，性別役割行動 (sex-role behavior) の問題を指摘し得る。この問題に関する研究数の貧困にもかかわらず，然乍ら，正常な人格の発達および適応と，個人の性に適正な役割学習との間に，重要な相関の在る事が繰返し主張されて来ている。古い例では，Freud (7,8,9) は適正な性役割行動の発達を，同一化 (Identification) の概念を用いて説明した。新しい例では，Brown (4,5,6) を挙げ得る。彼によれば，子供は積極的に適正な性役割を発見し，自分自身をそれに適応させなければならないし，幼児期で獲得した性役割が青年期および成人期に於ける適応を規定する，となる。

男の子が男性役割を獲得し「男らしくなる」ことを学習する過程，あるいは，女の子が女性役割を獲得し「女らしくなる」ことを学習する過程の究明の必要性は，二つの理由にもとづく。第一の理由は，性役割えの適応の問題に対する研究考察は年々その数を増しているが，その大部分が成人についてであり，幼児期に見られる性役割発達の問題を取扱つた調査報告は殆んど見られない。第二の理由は，性役割適応に関する調査資料が，臨床心理，精神医学に関係する人々により急激に要求されるようになつた，という実際的問題に連る。註2

Guogh (14) によれば，社会は複雑な役割を持つているのであつて，若し人が役割をリアリスティツクに把握しているならば，さまざまな危機によく適応できるであろう，とされる。従つて諸役割についてのパースペクテイヴと，その移動に関する熟練とが，適応能力に大きく影響を与えることになるのであり，その否定的な場合の典型として，ヒステリー性麻痺と強迫神経症の患者を挙げている。更に，役割理論を幼児期に於ける性役割発達という特定な問題に限ると，幼児期の性役割適応の困難，あるいは，性役割選択 (Sex-role

---

註1）本稿は，琉球大学1958年度研究助成費による研究にもとづく。本稿の一部は，慶応義塾大学に於ける，日本心理学会第二二回大会で発表される。

註2）此の点に関しては，本文2，3を参照。

Preference) の異常傾向が，成人期に見られる不適応現象や，情緒的障碍 (emotional disorders) と機能的関連があるのであろう，という事が多くの臨床心理学者により認められて来た。要するに，幼児の性役割行動は重要な心理学の研究問題であり，此の問題と成人の適応問題との関連を踏査した資料の必要が第二の理由の基になつている。

1.1 性役割の文化的分化：

社会は，男女に対してそれぞれ何らかの点で明確に区別された役割を与えている。それぞれの人は，時代およびその人の文化的背景により多くの点で相異している故，性役割に対する概念は全ての人に一致するものとは考えられない。この事は文化人類学のみならず，吾々の文化史も指摘して呉れる。所が，一般の人々には性役割の差異は生得的な差異に応じているように思われる。体質やホルモン分秘に見られる男女の差異が多くの性差に結びついていないとする事は確かにおかしい。ただ困難な事は，生得的な差異が人格の差異の源泉としてどこまでであり，文化的規定が人格の性差の源泉としてどこで始まつているか，正確に指摘し得ないという事である。男と女の行動上の特徴的差異——男が性的関係に於いてイニシアテイヴをとる態勢にあるというような差異——は，確かに生物学的な差異によつて部分的に決定されているといえよう。又男性優越の傾向が種々の社会に於いて支配的であつた事は，歴史的に身体的力の性差に関連ずけられて来た。然し，多くの性役割に見られる性的差異は，生得的要因に関連している事は否定出来ないが，一般に広く考えられている程，生物学的に決定されているわけではない。優越傾向の性差の度合は，一つの文化より他の文化へとその差を見せており，身体的・生理的要因が直接に性差を作り出したというより，ある社会に於ける学習条件や文化的要素が一層支配的であるというのが適切であろう。即ち，吾々の社会に於いては，女の子は生れて直ちに赤い着物が与えられ，赤いふとんにねかされる瞬間より，女性に対する役割の訓練を受けているのである。

文化人類学的研究は，吾々の社会での男性ステレオ版が他の民族や他の社会に於いてはそれぞれ逆であり，それに応じて男性像が変貌している事を述べている。換言すれば，これまで未開社会に関する調査研究の結果から，男性の従事する役割に対し，男子は生得的な好み (innate preference)を持つていたのではない事が示された。例えば，Kleinberg (18, Ch, 10) は適性に見られる性差に対する社会的圧力の影響を論じ，中央アフリカでは裁縫は男性の仕事であり，女性はあえてその領分をおかそうとする事もなく，従つてそれを女性がしている宣教師に対しては少からね反感が寄せられていると述べている。

Mead (20) には，ニューギニヤの三つの未開部族に認められる男性・女性の情緒的特質が，文化的要因に規定されている事を明らにした著書がある。三つの部族は各々の示す，男性女性の性格特性が非常に対象的である。

Arapesh 族に於いては，吾々の社会で明かに女性的性格と看做されている情緒特性が，男女両性にひとしく認められる。この部族では両性ともに協力的，非戦斗的，柔和になるように訓練されている。

その二は，河の流域に居住し，首狩りをおこなう Mundugumor 族である。この社会

では，前者とは全く異り，両性ともに激しい気質を持ち，競争的であり，嫉妬心が強く，復讐心に燃えている。妊娠，出産という出来事に関しても，その期間に夫には種々のタブーが課されているために，人々はあまり悦びを持たない。子供はこの愛情の薄い社会に生れて来る事になる。此の社会が前出の社会と共通点があるとすれば，それは両部族に於て，男女両性間に性格的差異があまり認められない。という点であると云えよう。

その三は Tchambuli 族で，彼等は恐らく一番興味のある生活様式を示している。彼等の文化に於ては，普通の社会で考えられる性役割とは逆の性役割が見られる。Tchambuli 族では，支配的地位を演じているのは女性であり，社会の主権は女性の手にある。男性は女性にこびへつらい，依存する事に満足を示す。湖で魚をとり，蚊よけの網をあみ，これらによる物々交換をする事によつて，部族の生計はたてられているが，この仕事に従事するのは女性である。一方男性は，美的事物に関心を持つており，例えば，衣服等の飾りは彼等の仕事であり，祭りの際の踊りは男性の重要な仕事となつている。此の種の生活様式は両性間の性格差異に著しく反映されている。即ち，男性は従順であり，情緒的に卑屈であり，他人の意見に敏感である。これに対し，女性は極めて淡白であり，人の問題で気をくさらせる事は殆んど無い。

此等三つの部族に於いても，普通の社会で見られるように，「偏差者」(deviant) がいる。即ち社会の持つ各性像に，その人の人格特性が一致しない人である。然し乍ら，一つの文化に於いて偏差者と看做される者も，他の文化に於けの期待に一致する事になる。以上三つの未開社会の調査の結果を総括して，ミードは，男性的・女性的とよばれる性格特性の多くは社会的・文化的に条件ずけられてたまたま性に結びつけられているにすぎない，と結論する。

"吾々は，人間性は信じられね程に順応性のあるものであり，異つた文化的条件に正確に異つた反応をする，と結論せざるをえない。異つた文化の人々の間に認められる個人差と同様に，殆んど条件ずけの差異，特に幼児期の初期に於ける条件ずけの差異にある。そして，この条件ずけの型は文化的に規定されている。標準化された人格の差異は，此の種の文化的産物であり，各世代の男女はそれに同調するように訓練される" (20, p.191)。

生理的差異が行動に性差をもたらす事は事実であり，決してゆるがせない事である。然し乍ら，それにも増して重要な事は，そのような差異にもとずき社会が如何なる生活態度・見解を，男性女性にとらせているかという事である。上記の論述からして，人が社会的に又心理的に男性であるか女性であるか，即ち，性役割行動により男性女性という事は，学習，文化的要因に大きく支配されている，と結論ずけられよう。

2　性役割発達および適応に関する仮説その背景

2.1　性役割同一化と人格類型 (personality patterns):

此の研究で，幼児が親，あるいは彼をとりまく重要な人々の役割を学習し，演じ，更に幼児が彼の超自我を形成して行く過程を記述するのに，「同一化」という術語を用いる。

Mowrer (23) は，臨床的観察と彼の学習理論の枠組内で，同一化と人格発達の重要な関係を論じ，家庭に於ける幼児の同性の親に対する同一化の困難さが，神経症の素因を作る点を強調している。即ち，彼は次の如く述べる。

"The neurotic, it appears, is a person who, as a consequence of the kind of family pathology described, has failed to make a full-fledged, whole-hearted identification with the same-sexed parent but who, at the same time, has not fully identified with the opposite-sexed parent." (23, p. 597)

更に彼は，個人の正常さは，全人に必要であり適正と看做されている価値，理想に同化するだけでなく，個人にとつて適正な性役割に同化する事を予想する，と述べている（p.615）。

同一化と人格発達の関係を考察して彼は，次の三つの結果と三つの人格の基礎的類型の可能性を挙げる。

1．正常な成人（normal adult）の性役割行動は，同性の親に対する同一化の過程の結果である。

——正常（normality）

2．倒錯した成人（inverted adult）の性役割行動は，異性の親に対する同一化の結果である。

——性別倒錯（inversion）および性的倒錯（perversion）

3．神経症的成人（neurotic adult）の性役割行動は，双方の親に対する，あるいは両性のモデルに対する混同した同一化（confused identification）の結果である。

——神経症（neurosis）あるいは不適応（maladjustment）。

此の研究の動機は，Freud の同一化の概念と上述の Mowrer の仮説を検証する事に在つた。

しかし，仮説の検証に先立ち種々の重要な問題が関連して考えられる。先ず第一に，幼児期に学習された性役割選択の型（sex-role preference patterns）の量的表現が可能か。第二に幼児期で認められる性役割選択の傾向は，青年期，成人期に至るまで保たれるものか。第三に，性役割選択の規定に機能的関係を持つ，心理的・環境的要因は如何ようなものか，そして第四に，幼児期の性役割選択傾向をもとにして，Mowrer の仮設の方向に，性的倒錯者を予見し得るか，等が考えられる。此の第一の報告に於ける筆者の目的は，此等の問題の第一に関する解答を Brown, D. G. 等の研究に基づき試みる事に在る。満足な結果を第一の問題に関して得る事が出来れば，第二，第三の問題に関する研究法も生れて来よう。

2．2 性役割発達に認められる性差に関する仮説：

グループとして比較する時，男女両群間に，著しい性役割選択傾向の差異の認められる事が予想される。若し，幼児期に於ける性役割選択の数量的表現が可能であれば，男の子の得点は男性得点（M一得点）に片寄つて分布するであろうし，女の子の得点は女性得点

（F—得点）に片寄つて分布する事が予想される。然し乍ら，男女両群ともに等しい傾向を示して，各性に適切な役割に反応するか否かに関しては疑問がある。即ち，男の子で女性役割に反応する子供の数と，女の子で男性役割選択を示す子供の数に認められる性差の問題である。

Freud, S. (8,9)，の論に依れば，男の子の場合に比較すると，「幼女が正常な女性に発達するのはより困難であり，より複雑である」（8，p.179）とし，その理由として解剖学的性差をあげている。陰茎の無い事を発見する事により，女の子は自分はひどく傷つけられていると感じ，陰茎羨望に陥り，この事は女の子にとつて女性の価値は減ぜられるという意味である，と Freud は云う。男の子の場合には，エデイプス・コンプレクス——このコンプレクスにおいて男の子は母親に欲情をおこし，競争相手としての父親を除去したいと思う——は去勢威嚇により廃棄され，抑圧され，適切な性役割えの同一化がおこなわれる。所が女の子の場合には反対であり，去勢コンプレクスがエデイプス・コンプレクスを破壊するのでなく，却つてそれを準備するのであり，陰茎羨望の影響によつて女の子は母親拘束から追いやられて，エデイプス局面（Ödipussituation）の中へ駆け込む。女の子はエデイプス・コンプレクスの中に漠然と長い事そのまま踏みとどまり，ただ後になつて不完全にそれを除去するに過ぎないと Freud は論ずる。

Freud は，身体的差異により，女の子は適正な役割に適応する事に困難を感じ，「男の子になりたいとは女の子の願う所」（8，p.205）であり，「"小さい女の子は小さい男の子" である事を承認しなくてはならない」（8，p.180）とする。

性役割選択に見られる性差に関して，Adler (1) は，現代文化を分析して，「目下の状勢では，男性の側の女性を凌駕しようとする不断の努力と，それに応じて女性の側の男性の特権に対する絶えざる不満とが相並んで続いている」（1，p.147）と述べ，男性役割に附加されている社会的文化的利点を重視した。小さな女の子は幼児期の初期から，男性役割の持つ多くの威光や特権を知覚する。例えば，Adler は「今日の家庭教育は，力をもとめる努力と，それと共に男性の特権を高く評価し熱望する傾向を，促進するためにだけ適している。何故ならば子供の目に力の象徴として映るのは大低夫であり，父親であるからである。彼は家庭からいなくなつたり戻つたりするので，その神秘性が母親より子供の興味を惹きつける。子供たちはたちまち父親の優越的役割に気づく。」（1，p.148）と云う。この事は女の子に羨望と屈辱の感情を起させるであろうし，女性の心の発達に非常な混乱をもたらし，「女性が自分の役割にほとんど一般的に不満を持つ結果となる。」（1，p.160）。

Adler はこのような状態の結果として，男性役割を選択する "男性的低抗" (männlicher protest) が女の子に表われると説明する。

異つた基礎に立つてはいるが，Freud の論も，Adler の論も，ともに，男の子が男性役割を受容れるよりも，一般に女の子が女性役割を受容されるのに不満と反抗を感ずを事を予想している。仮説として次のように云える。"男の子と女の子の身体的差異が原因となり，あるいは，男女の社会的差別待遇が女の子の心に劣等感を植えつけるために，ある

いは両者がともに働いていたために，幼児期の性役割発達に於いて，男の子の女性役割選択傾向よりも，女の子の男性役割選択傾向が大である"。

Freud の論も，Adler の "男性的反抗" の概念も，上記の仮説の部分的な理論的背景になり得よう。前者の論には，然し乍ら，文化的要因に対する考察の不充分さが感じられる。文化的に規定された性役割より脱逸する事が，パースナリテイー不安の一つの原因であり (24)，各性の支配的従属的欲求を学習する機会が各文化間に差異があるとすれば，全ての文化に於いて，両性が等しく支配的欲求満足を望むとは考えられない。換言すれば，ある文化に於ける一方の性は，従属的欲求を満たす事がパースナリテイ適応の方法である、という事を学習しているかもしれない。此の点より，Adler の論が直ちに全ての文化に適応され得るという事には，たとえその文化が "男性中心" により特徴ずけられているとしても，筆者は疑問を抱く。上記の仮説は，性役割行動を適切に学習する場合に，困難を生じさせる多くの文化的要因が充分考慮されていない点で，理論的背景の弱さがあると云えよう。

D. G. Brown は，アメリカに於ける，両性の性役割学習に対して影響を及ぼす，文化的圧力の実態を考察し，男の子より女の子の方が適正な性役割に適応する場合に，より大きな葛藤を経験するであろうと予見する。"変化する性役割の心理学的意義" の題のもとに行われたシンポウジアムで，彼の発表した論文に挙げられた要因を，次のように要約できよう。註3）（a）アメリカの社会では，性役割の選択に於いて，男の子程に女の子の場合には厳格さがなく，自由も多い。この事は，概して男性役割は，女性役割よりも上位にあるという一般の考えに通ずるものであり，女の子が前者の役割を獲得しようとした場合に，阻止を受けるような事はない。又，女の子が "tomboy" である場合に，男の子が "sissy" である場合に受けるような，社会的制裁は認められない。（b）女性は，職業に専念すべきか，あるいは，家事に従事すべきか，又は両者を成立させるべきか，等の問題に直面する。（c）今日の女性の地位と，過去の女性の地位の相異。過去に於いて明瞭に定義ずけられていた女性の地位役割は，今日では，その明瞭さを失い，単数で表わす事も出来ない。例えば，職業的役割についても文明の発達に伴い，過去に於いて男性役割と看做されていた職業に，女性の進出が見られるようになつた。そこで Brown は，女性の自己役割に対する認識は不安定であり，役割学習に葛藤も多い，とする（4，P.3)。

幼児の性役割発達に関する仮説として，上記の文化的要因を Freud および Adler の論に加えて考慮する場合，次のように云える。即ち，"男の子の性役割選択に比較した場合，女の子の性役割選択には，混同した選択 (ambivalent preference) がより多く認められる" 註4）

筆者は，本研究の幼児に見られる性役割選択に於いては，Brown の仮説と逆の結果の表われる事を予見する。調査の対象として選ばれた子供等は，服装とか或種の遊びに性別が加えられているのは事実だが家庭に於いて性別が強要される事もなく，男女ともに類似

註3）要約の責任は全て筆者にある。
註4）Brown は，此の仮説を証左する資料を繰返し得ている。

した遊びを楽しんでいると報告されている。註5）幼児に対する両親の態度に，特に「女らしい女」「男らしい男」になる事を要求する態度も見られない。幼児期に於いては，性別にもとずく待遇の差を経験するような事は，此等の子供達は家庭で殆んど無い。例えば，端午の節句は男の子丈の日ではなく，桃の節句には男の子も女の子と一緒に楽しむのである。男女共学の結果として，男女の知識や技能が平等に育成され，女の子も男に負けずに同じ学科を修める事が奨励され，時には，女性が男性的な考え方や行動を取るようになつて来ている，という事が報告されている（32）。 Brown の挙げている。文化的要因の第二の要因と，此の事は関連させて考えられよう。然し，此の問題故に，女の子が性役割選択に困難を経験するとすれば，沖縄の社会に於いては，それは学童期，或いは青年期以後に経験される問題であり，直ちに幼児の性役割選択に影響を及ぼしているとは考えられない。更に，男女の能力の平等化，職業生活に於ける男女の平等化，等の新しい考えが唱えられているとしても，"文化的遅延" (caltural lag) の問題を考える時，此の事が直ちに，幼児の性役割に対する態度に，反映されるとは考えられない。要するに Brown の挙げる文化的要因の第二，第三の問題は，沖縄に於いても考えられる事ではあるが，幼児の性役割行動に及ぼす，それらの影響は，殆んど無いであろうと筆者は考える。先きに筆者は，此の調査に於いては，Brown の仮説とは逆の結果を予見すると述べたが，以上の論述により筆者の仮説の部分的説明を試みたのである。

S. M. Stoke (29)，註6）T. Parsons (27)，および，G. R. Bach (3) 等は，同一化を容易にする要因として，子供がどの程度同一化の対象と接触しているか，という事を指摘している。此事が，更に，筆者の仮説の背景となつている。幼児期の性役割選択で，女の子は男の子よりも，適正な役割を選択するのが困難である，との Brown の仮説に対照的例として，T. Parsons (27) のアメリカの文化で見られる年令性別による行動の制限を取扱つた論文がある。男の子が性役割発達に於いて，女の子と同様に困難を経験するであろうとし，その理由として，今日の社会では，大低の父親は家庭外に仕事を持つているため，男の子は適切な性役割同一化のモデルに接する機会が，女の子の場合よりも少ないと述べている。この事は，父親が出稼ぎに長期間出ている家庭に於いては特にそうである。更に，Parsons は，母親は多くの時間を家庭内で費し，彼女の従事している仕事はより具体的であるために，女の子は小さい時から大人の女性役割を容易に学習し得るが，男性役割は比較的抽象的なため，男の子は父親の仕事の意味を解するのに困難を感ずるであろうし，従つて男性役割を学習するのに困難を感ずると論じている。筆者の調査対象となつた男の子達の父親で，家庭外に職業を持つ者は（父親のいない子供も含めて）87%と報告

註5）城西幼稚園教師の家庭訪問報告にもとづく。

註6）Stoke は必しも同一化の過程における同一化のモデルと子供の接触の量を極度に重視する訳ではない。両者間の情緒的関係も併せて考える。更に，Stoke は，両性の役割混同，類似性が一つの社会において増大すれば，子供が同一化の対象と接する機会が多いという事は，同一化を容易にする要因にはならぬであろうとも述べている。

されている。女の子達の母親で家庭外で仕事を持つ者は，22%となつている。78%の母親は家事に従事していると考えられるし，家庭外に仕事を持つ母は，全く家事より離れているとは考えられない。此の意味で，Parsons の論は本研究にも当嵌まると言えよう。

Sears 註7）は，男性役割には文化的に多くの特権が附加加されているかも知れないが，男の子は適正な性役割同一化を行うのに，女の子より困難を経験する，と述べる。女の子と同様男の子も，最初の同一化は母親，あるいは，女性的モデルに対して形成される。男の子の場合には，然しながら，正常な性役割が発達されるためには，幼児期の同一化は，父親，あるいは，男性的モデルに対する同一化へと変つて行かねばならぬ。此の事は，女の子の場合には問題にならない。母親との間に満足な関係が成立されている限り，女の子の女性的同一化 (feminine identification) は容易に続けられる。 Freud は男女間の身体的差異を重視し，Adler は社会文化的差別待遇が女性に "男性反抗" を起させると述べるが，情緒的に満足な関係が母親との間にあり，女の子の欲求に対する母親の注意が充分であれば，女の子は意識的にも無意識的にも，女性役割を自然に投入 (introject) する。

本研究の標本は，その文化的背景に於いて，性別による差異のある待遇を殆んど経験する事は無いし，「男である事」「女である事」に対する不満はあまり無いものと思われる。更に，上記の Parsons 等の幼児期に於ける同一化の過程に対する考察と，Sears の意見を加えて，筆者は，此の調査に於いて次ぎのように仮説する。"沖縄の就学前記の幼児では，性役割選択に於いて，混同した型を示めす傾向は，女の子より男の子が大である"。

猶，Brown の仮説と，Parsons および Sears の見解は，必しも矛盾した関係にあるのではない事を簡単に指摘しておく。性役割選択に於いて，女の子は，「女の子であること」に不満を持つであろうから，困難を感ずるであろう，という点を前者は指摘している。後者は，男性役割のモデルに男の子は充分接し得ないだろうから，性役割発達に困難がある，という点を指摘している。此の異つた二つの予見に関連して，Brown(4,5,6) が繰返し主張する問題を論ずる事は妥当のように思われる。彼は，性役割同一化 (sex-role identification) と性役割選択 (sex-role preference) の概念の相異を明瞭りさせるべきである，と述べている。前者は，個人が一方の性を自分のものと考え投入 (introject) する行動を意味し，後者は，個人が一方の性の行動が好ましいと知覚し，その性役割を選ぶ行動を意味する。一般に，個人は，一方の性に同一化を行い，その性役割を選んでいる。即ち，女の子が女性役割モデルを好ましいと選び，女性役割に同一化を行う場合である。このような場合には，別に内的葛藤も無く，同一化も選択も一つの行動にとけ込んでいる。然し，全ての場合に此の事が云えるのではなく，適正な性役割モデルに同一化が行われているが，選択は異性役割モデルである，という場合である。例えば，女の子が母親

註7）1957年9月に催された，アメリカ心理学会でのシンポージアム「変化する性役割の心理学的意義」で Brown の発表した論文にもとづく。

の仕事を投入しているが，父親の仕事を好む（prefer）という事がある。この概念の相異に留意して，Brown は次のように述べる(4)。 性役割発達に於いて，女の子は同一化を容易に行い得る。然し，文化的に規定された "男性有利" のため，適正な性役割を受容れるのに男の子よりも困難を感ずる。男の子は性役割同一化の過程に困難があるが，"男性有利" のため，男性役割を選択する（4, p.10）。男の子の性役割同一化の出発が母親，あるいは，女性役割モデルに対してであり，適正な役割同一化が不明瞭であるとすれば，果して，男の子は "女性不利" を意識し得るか，あるいは出来るとしても，適正な役割選択が不能であるか，此の点に筆者は疑問を持ち，Brown とは意見を異にする。

2.3 性別倒錯の発達：

性別倒錯者と同性愛者とは屢々同義に考えられているが(9)，同性愛者は全てが性別倒錯者ではない。然し，性別倒錯者は同性愛者になる傾向にある。(6) 性別倒錯により同性愛者になつた者の，精神病理は未だに解決されていない問題であるがおそらく生物学的には解明出来ない問題であろう(16)。

性役割倒錯の発達に於ける，根本的な社会心理学的条件は，幼児期の初期に異性の親に同一化が行われ，それが継続的に行われた為に，異性役割選択が定着される場合である，と仮説ずけられている(6)。 そこで家庭の型によつては，子供に同性の親に対して，何らかの理由で，同一化が成立され得ず，加えて，子供が異性の親に強い情緒的関係を成立させる場合のある事が考えられる。成人の性別倒錯者は，幼児期の人格形成過程に於いて，父親が家にいない，男の子と父親との社会的距離（social distance）が大きい，あるいは父親が男の子に対して残酷である，等の特徴ある経験を持つている。更に，上記のような家庭に於いては，屢々，母親は男の子により偶像化されており，男の子は母親に対して強い愛着を持つている。此等の結果として，男の子は男性役割を投入する事に失敗する。具体的に記述するならば，此のような男の子は，幼児期では特に "人形遊び" "ままごと" 等の遊びに興味があり，女の子の持つ物が欲しく，女の子のように行動する事を望む。掘（16）は，男性同性愛者は，幼児期に女の子とばかり遊んだという経歴をもつ者が，かなり高いパーセントを占めていると報告している。以上のような発達が，性別倒錯の条件だとされる(6)。

此の仮説が，今後の調査で証左されるとすれば，子供の対人関係を変えて行く事により，性別倒錯の方向への発達を阻止する事も可能であろう。

猶，性別倒錯の発達に見られる性差に関して，女性が男性役割選択を示す場合には，基礎には，女性役割同一化がなされているであろうが，男性の倒錯者は，同一化も異性役割になされているであろうとの推定にもとずいて，次のように仮説ずけられている。(1) "性別倒錯者は男性に多く見られる"。(2) "幼児期で見られる性別倒錯は，男の子の場合により継続的であり，固定化される傾向がある"。

3　関連研究のレヴィユー

男性役割・女性役割と類型化された諸行動は，二つの広義に定義された意味での学習過程，即ち，意図的教授と偶然的学習によつて学ばれるものである。しかも，この二つの形式が同時に表われる事はいうまでもない。意図的教授の場合にはそれぞれの社会の中で，その文化の担い手達が，予め定められた行為を教えようとするのである。幼児の段階に於いて，男の子と女の子とは違つた形の行動について賞と罰とを受ける。こうして徐々に，一般化される性的役割を後々遂行するための学習が始まる。偶然的な学習に於ては，子供は彼のおかれた環境の中から，他人の行動様式を見ならい採用するのである。

単純知覚や単純連合学習より，更に複雑な精神機能，社会的態度に至るまでの問題に関して，性差の研究は数多く発表されているが，註8）　総合的な性差研究史（2,22,31）の中に，性役割学習に就いての性差研究は殆んど見当らない。

Terman と Miles (30) は，1936年に，広範囲に亘る性格に見られる性差の研究を行つた。彼等の研究はテストによるもので，七種のサブ・テストがあり，（a）言語連想，（b）インクブロツト連想，（c）知識，（d）情緒および道徳的反応，（e）興味，（f）意見，（g）内向的反応，である。それぞれの反応のタイプから，男性型と女性型の性格差を尺度化したものである。これらを種々の年令，知能，教育の集団に施行して，男女の性格差を明かにし，又，同性の平均からの脱逸度を測定し，個人差を示し得るようにした。現実の個々の男女は，絶対的男性と絶対的女性との間のさまざまな中間段階として存在している訳であるが，全体的に集団としての男性と女性とを比較すると，そこに明らかな男らしさと女らしさの違いを区別する事が出来る。各年令群に於て，いずれのテストにも男女間に有意差を Terman は発見しているから，彼のテストは両性間を区別する行動特性の選択に成功しているといえよう。彼等が明らかにしたところによれば，"男性的性格は，一般に手柄，冒険，戸外の身体的仕事，機械，道具，科学物理現象や発明に興味をもつている。一方，女性的性務は，家事，美的なもの，屋内での静かな仕事，幼児や不幸な人々への奉仕などに関心をみせる，"　"情緒的傾向では，男子は自己主張が強く，攻撃的で大胆であり，言語的動作が粗暴におちいりやすく，感情にデリカシーを欠く。他方，女子は同情心が深く，臆病であり，美的センスがするどく，潔癖である。感情的で道徳的ではあるが，感情の統制力は弱い，" という。

教育大学の小保内氏は，色彩象徴法テスト（C. S. T.）によつて，性度を量的に測定する事を考案している(25)。さまざまな刺戟語に対する各種の反応色彩についてその出現頻数を男女相互に比較対照して見ると，そこに著しい差異のあるものが見られる。C. S. T. の男性色彩女性色彩は，男性対女性の頻数に著しい差のある反応色彩は，性格に於ける男女の特質を反映していると考え，こうした色彩を摘出する事により選ばれている。さまざまな色彩に対する反応により "非常に男性的，"　"中性的"　"非常に女性的" と七段階で性度の程度が分るように作成されている。小保内氏は，多くの性度テストの妥

註8）Anastasy(2)は今日では千種以上の研究がなされているであろう，と述べている。

当性の問題点として，「さまざまな性度テストは，男らしさを示す客観的な行動特徴，女らしさを示す客観的な行動特徴を想定し，それを手掛りにして性度を測定しようとしている，」(25, p.76) 点にあると述べている。そこで C. S. T. 性度の内容を明かにするため，田中向性テストとの関係を調べている。結果として，「まず男性的なものは外向性，女性的なものは内向性という傾向をつかむことが出来よう。」(25, p.77) としている。然し「性度イコール向性とはいいきれる程，性度は単純でない，」と附加している。更に，性度と職業興味の関係に就いては，(a)「女性的なものには，対人，社会，芸能に対する興味が多く，男性的なものには自然，機械，研究領域に対する興味が多い。」(b)「中性的なものに，研究に対する興味が少ないという事実は興味ある現象である。男性的なものでは対人社会への興味が乏しい。」(25, p.79) と報告している。

これら二つの著書は，特に性役割発達の問題を取扱つたものではないが，"男らしさ" "女らしさ" を規定する特徴行動と，性度を測定する方法について暗示性に富む。

性役割発達の問題に関して，一体，普通の幼児は何才になると男性・女性の意味，即ち，性役割行動の差異と同時に，生物学的差異を意識するようになるか，という問題がある。

A. Gesel (11, p.314) によれば，子供は自分が何であるかを理解する事が最初であり，性差を認める手がかりとなるのは，着物，帽子，頭髪のかり方，等である。もつと基本的な身体上の差異に気がつくのは，それ以後であると述べている。三才ぐらいの子供に，「あなたは小さい男の子ですか，小さな女の子ですか」という質問をしてみる。「ふつうの男の子では正しく答える事が出来るが，自分の名前をいつて答えようとする者もいる。女の子には，"私は男の子です" という答えが少し多いようである。この答えが男まさりの反抗であるかどうかは，分らない。」(11, p.313) と書いている。然し Gesel は，三分の二から四分の三の子供に，三才までには，生物学的性差に対する分化が認められると報告している。「性に関して正しい知的な区別が出来るようになつてから，子供が男の子または女の子としての適正な役割を定め，確立するには」この年令より，「なお数年を要する。」(11, p.313) とGesel は記しているが，この点に関して Brownは，註9) 性役割の分化は徐々に発達し，生後五年目までに，或いはそれまでの期間に，殆んどの幼児が男の子あるいは女の子であるという事に対する，生物学的あるいは心理学的手掛りを充分持つ，という。他の心理学的発達と同様，当然の事ではあるが，両性間の差異に対する幼児の知覚の発達に，著しい個人差が認められる。

性役割学習の源泉に関する調査，最初の分化が何才で始まるか等の報告は見当らないが，就学前期の幼児，および学童期の子供達に見られる，性役割選択の傾向については，Brown (4, 5) の研究がある。Brown は，"It Scale for Children" と呼ばれて知られている方法により，この問題の調査を行つている。この尺度は，男性役割あるいは女性役割に特に連合されている事物，人，等の画かれた36枚の絵より構成されている。"It"

註9) 前述 Brown の発表論文による。

と呼ばれる子供の絵が，テストの施行される場合に併用され，この子供の性については比較的曖昧に画かれている。テストを行う時，試験者は直接被試験者に選択して貰うというより，"It"（子供）のために被試験者に性役割を選択して貰う方法を用いる。"It Scale for Children"（I T S C）の採点方法によれば，男性役割に対する反応にのみ点数が与えられ，女性役割に対する反応には，点数が与えられない。性度点は84点，非常に男性的，より0点，非常に女性的，まで分布する。各年令グループの男子群と女子群の平均値は全て，.05の有意水準で差が認められる（4, p.7, 5, p.198）。

Brown の研究報告によれば，男の子は就学前期に既に明瞭りした男性役割選択の型を見せており，学童期に入つてからは，男性役割選択の傾向は更に増大する。アメリカの中流階級の子供では，各年令（3.5才～11.5才）を通じて男の子が男性役割に対する選択傾向は，女の子の女性役割に対する選択傾向よりも，強く明瞭り表われていると報告されている。

男の子の男性役割選択傾向の強さに比して，女の子は可成り異質的選択傾向を集団として示す。就学前期の女の子では，男性役割と女性役割に等しく選択傾向を示している。6才より9才までの集団では，彼等の選択傾向が著しく男性的である。小学校一年より四年次までの女子を全体として考える時，46%の得点は「非常に男性的」であり，「非常に女性的」得点は僅か17%となつている。女の子は，9才10ケ月より11才6ケ月の間に，役割選択傾向に著しい変化を示す。例えば，五年次の者では，「非常に女性的」選択傾向を示す者が多い（5, p.200）。

1955年の調査で，子供の時に認められる性役割選択の型と，或人のそれとを比較する目的で，Brown は新しい項目を ITSC に設けている。即ち，彼は，「It は大きくなつたらお父さんになりたいと思うでしようか，お母さんになりたいと思うでしようか」と被験者に質問する。この項目の結果を要約すると，男の子は就学前期より11才までの各年令を通じて，「It はお父さんになりたい（prefer）」と80%から95%の者が答えている。これに対して，女の子では25%から45%の者が「It はお母さんになりたい」と答えているにすぎない。子供に見られるこの傾向は，アメリカ文化における成人についての調査の結果と一致する。Terman その他の調査者達が「あなたは，時々，自分が異性であればと思う時がありますか」あるいは，「若し生れかわつて来る事が出来るとすれば，あなたは男と女とどちらを選びますか」の形式の質問で調査を行つている。「女性であれば」の願望を持つ男性は，男性群の2.5%より4%であるのに比して，女性群では，20%から31%の者が「男性であれば」の願望を持つている，あるいは持つた事があつたと報告されている（5, p.201）。

E. W. Goodenough (13) は，2才—4才の男の子と女の子に認められる，人に対する興味の差異と，両親の性役割類型化（typing）に対する態度との関連について，調査している。彼女の調査の主な結果は次のように云える。（a）幼児の画いた絵とそれについての幼児の説明により，女の子の方が男の子よりも，人に対する興味を多く示す。（b）女の子は男の子よりも，異性の人物を画く傾向がある。（c）男の子の方が女の子

よりも，性役割を明瞭り定義ずけている。以上のような結果を説明するのに Goodenough は，家庭において「男らしさ」「女らしさ」の要求される度合に，男の子と女の子に差のある事を指摘している。面接法により，家庭において，父親の「男の子は男らしく」の態度が，母親の「女の子は女らしく」の態度よりも厳格である事を発見し，此の事が，2才～4才幼児の性役割の分化に認められる性差に反映しているという。

アメリカの文化で，中学校以後の青年期において，男子は男性役割を獲得し男性的特徴を持つ事は，社会的賞 (reward) を受ける事になるが，女子の場合は，女性役割モデルを受けいれ女性的特徴を持つ事は，必しも社会的賞を受けない，と報告されている。このような一般的傾向の報告にもとずき，適正な性役割発達と適応の問題を，"不安水準" (anxiety level) と社会的容認 (social acceptance) の問題に関連させた研究に，S. W. Gray の論文がある。(15) 第一の予見として，Peer group による拒否は，anxiety level を高めるものと規定し，青年前期で anxiety の高いグループと低いグループを，適正な性役割行動について比較する時，二つの変数間の相互作用が見られる，と Gray はいう。即ち，男子群では，低い anxiety と適正な性役割行動に関連があり，女子群では，高い anxiety は適正な性役割行動と関連がある。第二の予見としては，男子群では，社会的容認度の高さは，適正な性役割行動と関連があり，女子群では，社会的容認度の高いのは，適正な性役割行動の程度の低さと関連がある，と述べている。Gray は，中流階級の中学一年次の男子34人，女子27の標本を抽出し，仮説の統計的検定を行つた。第一の仮説に関しては，女子群では予見した方向と同じ結果をを見ているが，男子群では予見と逆の結果を見た。此の年令の男子では，男性役割を維持するのにストレスを感じ，このために anxiety が高まるのでなかろうか，と Gray は説明している。第二の仮説については，予見と同じ方向の結果を得ている。男子群については，適正な性役割行動の度合の高い者は社会的容認を受けていないようである。

性役割に適応して行く事が人格形成の領域で重要である事は，臨床心理学に係わる人々から認められて来たが，資料はまだ乏しい。成人期に於いて，性役割期待に適しい行動が獲得されているかという事は，正常な満足な社会的発達と適応の重要な要素である。

M. R. Read (28)，人格構造と適応の問題を考える時，男性性格—女性性格の各次元 (dimension) の影響を，臨床心理学は想定する事に努めねばならぬ，と述べている。フロイトは，人格組織のこの面が適応問題に於いて，中心的役割をなす事を指摘している。Read は，25人の精神病質の女子患者に対し，絵画完成法 (DC)，MMPI，人物画検査 (D-A-P) を使用して，人格の種々のレヴエルに見られる男性性格・女性性格の，正常な女性と比較した時の差異を測定している。Read は，男性性格・女性性格の次元に，二つのレヴエルがあると仮説ずける。(a) 第一のレヴエルは，非言語的，あるいは知覚動動的レヴエルで，フロイトのいう Id 構造に関連する。DC，又は D-A-P で測定され，正常者と神経症者との間に著しい差が認められる，と仮説されている。(b) 第二のレヴエルは，言語表現に関連しており，フロイトの術語を用いれば，"超自我" あるいは "文化的期待" (cultural expectancy) と関連している。MMPI で測定され，正常者と神経症

者との間に著しい差は認められない，と仮説されている。Read は仮説で予見した方向の結果を得，精神病患者群の障碍は，非言語的レヴエルの組織（Id 構造）にあり，DCにおいて著しい男性性格反応が認められる，と報告している。非言語的レヴエルのこの異常体制は，文化的期待との間に差があるため，承認しにくい衝動を起す源泉となつており，神経病者の適応を困難にしている。彼等が絶えず感ずるストレスの根源となり，その結果日常生活における挫折をつくり出すのではなかろうか，と Read は考える（28, p 293—294）。

4 研究目的および方法

4.1 目的：

正常な人格の発達および適応の問題と，個人の適正な性役割行動との間に，重要な関係が在る事は繰返し主張されて来た。然しながら，此の研究領域における調査資料は極めて少なく，殊に，幼児期に如何ような性役割選択の傾向があり，幼児期に学習された役割が如何ように把持されて行くか，あるいは性役割選択を規定する要因，等に関する調査資料は殆んど見られない。研究領域の仮説の検定，理論の体系化に先立ち，「幼児期に性役割選択の分化が認められるか」との問に対する答えが必要である。筆者の研究で，幼児の "性役割選択" の概念を，性別に類型化された事物，人，活動，等に対する幼児の選択反応，と操作的に定義ずけておく。此の問題を究明するには，幼児期に見られる性役割選択を量的に表現し得る尺度の構成が要求される。

本研究は，この要求を充たす尺度構成に対する試みであり，性役割選択と適応の研究領域に於ける仮説の検定，理論の体系化への pilot study となる事を目的としている。此の意味で本研究の性格は，如何なる点に関しても結論的（conclusive）であるというより，探索的（exploratory）である。

目的を次のように要約する。

1. 沖縄の幼児に見られる，性役割選択の型を量的に表現する尺度の構成について考察する。

2. 沖縄の6才児に見られる，性役割選択傾向の性差，および性差を規定すると思われる要因について究明する。

なお，性差に関しては，（a）男の子と女の子を集団として比較する時，性役割選択傾向に著しい二分化（dichotomy）が認められる。（仮説）（b）本研究において，男の子と女の子を比較する時，混同した性役割選択は男の子に多く見られる。（仮説）（c）性別倒錯者的選択について，男の子と，女の子に差があるか，等の三点より考察される。

4.2 方法：

4.2.1 被験者——此の研究に被験者として抽出された子供は，筆者の勤める琉球大学に最寄りの那覇市首里城西幼稚園の子供達である。実験室に容易に連れて来れる，という事が選択の基準であつた。此の意味で，此の研究の被験者が直ちに沖縄の6才児という母集団を代表する，と考えるのには無理な点がある。男の子53人，最高年令6才10ケ月

最低年令5才11ケ月，平均年令6才4ケ月，女の子54人，最高年令6才10ケ月，最低年令5才11ケ月，平均年令6才6ケ月，が性役割発達のテストを受けた。本研究の資料は，全て此等幼児のテスト結果に基づいている。男の子の父親の87%が家庭外に仕事を持ち，女の子の母親の78%は専ら家事に従事している。

4.2.2 測定道具——沖縄の幼児の性役割選択傾向を量的に表現する目的で，Brown (4.5) の作整した "ITSC" の原理に基いて，筆者は，「幼児用性役割選択尺度」（以後「幼児用 M-F 尺度」で略す）を作整した。社会的に男性・女性役割と看做されている行動型を対照させる方法に基づいて，ITSC に含まれる項目は選択されている。男の子に典型的に見られる活動や事物を，女の子に典型的に見られる活動や事物と対にし，加えて，成人期に見られる男性役割と女性役割を比較させる事が，ITSC の内容の基礎となつている。

「幼児用 M-F 尺度」は，30枚の，6.5×9（インチ）図版で構成され，ITSC と同じ原理に基いて，各図版には玩具，人物，道具等が画かれている。「男性項目」（M-項目）「女性項目」（F-項目）は，ITSC の項目より大部分が採用されているが，沖縄幼児の経験範囲で選ばれ，画かれている。例えば，吾々の文化においては，男の子は「ピストル」「機関車」等の玩具で遊ぶのが普通であり，服装は「ズボン」であり，大きくなつて「ひげ剃道具」を用いる。女の子は，「人形」「ままごと道具」等の玩具で遊び，服装は一般に「スカート」をはき，大きくなつて「化粧道具」を用いる。このような「M-項目」F-項目」に対する幼児の選択反応 (preferential responce) は，「男性役割」「女性役割」の種々の面に対する選択傾向を意味する，と想定出来よう。更に，「女の子になること」が男の子の欲求である場合，「男の子になること」が女の子の欲求である場合には，性役割選択の方向が逆である事を意味する，と云えよう。以上の例より，筆者が再構成して本調査で使用した「幼児用M-F 尺度」の構成的妥当性について，次のように云える。性役割選択の量的表現の目的で使用された尺度の構成的妥当性は，社会的に「男性的」「女性的」と看做されている行動，あるいは，「男らしさ」「女らしさ」という事に関連ずけられている事物は，個人の性役割に対する反応型を，「男性的」「女性的」と定義ずけるのに適介な基礎である，との想定に基ずいておる。

「幼児用 M-F 尺度」は次の三主要部より構成される。

(1) 「幼児用 M-F 尺度」の第一部は，10枚の玩具の図版で構成され，次の項目が含まれている。

ピンク色の小犬	ピストル
ブルドーザー	兵隊さん
人形	赤いかばん
トラック	首飾り
機関車	ままごと道具

(2) 「幼児用 M-F 尺度」の第二部は，8対の図版で構成され，次の絵が対になつている。

おとぎ話の王様——おとぎ話の女王様
ズボンとシャツ——女の子の洋服
裁縫道具——飛行機の部分品
化粧品道具——ひげ剃り道具
男子用靴——女子用靴
遊んでいる女の子達——遊んでいる男の子達
大工道具——台所道具

(3) 「幼児用 M-F 尺度」の第三部は次の四人の子供の絵で構成される。

女の子
女の子の服装をした男の子
男の子の服装をした女の子
男の子

「幼児用 M-F 尺度」の採点法は，次の通りである。

1. 玩具の図版の部では，「M-項目」を一つ選ぶことに1点を与え，「F-項目」を一つ選ぶごとに0点を与える。各被験者は5個の選択が許されているから，得点の範囲は，0点（全F選択）より5点（全M選択）までとなる。

2. 第二部においては，「M-項目」を一つ選ぶごとに5点を与え，「F-項目」を一つ選ぶごとに0点を与える。第二部は8対の絵より構成されているから，得点の範囲は0点（全F選択）より40点（全M選択）までとなる。

3. 第三部の採点法は次の通りである。「男の子」の絵に9点，「女の子のような男の子」に6点，「男の子のような女の子」に3点，「女の子」に0点が与えられる。

上記の採点法によると，「幼児用M-F尺度」の得点の範囲は，0点，「非常に女性的」より54点，「非常に男性的」までとなる。

測定道具の信頼度については，一ケ月の期間をおいて検査一再検査法により，信頼度係数 .91 が求められた。この信頼度係数は，Brown が彼の ITSC について得ている。信頼度係数 .71 および .84 (4) に比較して高い係数といえる。なお，幼児の多くの心理的特徴を測定するのに用いられるテストの信頼度と比較した場合にも，同様な事がいえる。本研究の資料集積の基礎になつている，「幼児用 M-F 尺度」は，測定道具として満足な信頼度を持つと云えよう。

4.2.3 検査実施方法——「幼児用 M-F 尺度」は個別式検査である。本研究の被験者は，琉球大学教育学部ビル，防音室あるいは児童観察室で検査を受けている。検査期間は，1957年12月17日より翌年の2月20日に亘つた。検査を受ける際に，被験者はテーブルに着き試験者より「二人でしばらく "赤ちやん" と一緒にゲームをしましようね」と告げられる。試験者は常に被験者の側に立ち，被験者の示めす選択反応を，用意してある採点用紙に記入して行つた。

「幼児用 M-F 尺度」を施行する場合，被験者に項目選択を直接要求すると，被験者自身の同一化している性役割とか性役割選択を測定するより，"社会的期待" あるいは "文化的圧力" に対する同調を測定しているのではないかと思われる。この点を投影法によつ

て克服する為め，「赤ちやん」と呼ばれ，性別については曖昧な人形が併用されている。「赤ちやん」を使用する場合には，被験者は彼の性役割の選択にもとずいて，彼自身を「赤ちやん」に投影するであろう，との想定がなされている。

この検査は一定の教示にしたがつて実施されたが，検査の教示を次に再生して見る。

幼児用 M-F 尺度の実施要領

テストを始める前に： 此処に「赤ちやん」がおりますね。可愛いでしよう。本当の赤ちやんとしましようね。しばらく二人で「赤ちやん」と一緒にゲームをするのです。さあ，カードに画かれている絵を，「赤ちやん」に見せてあげましよう。（若し被験者が，人形の性について質問をする時は，「この人形は赤ちやんでしよう。"赤ちやん" とだけ呼ぶことにしましよう」と答える事にする。）

教示：

1. 玩具の絵： ここに玩具の絵があります。綺麗な玩具ばかりですね。「赤ちやん」はどの玩具とも遊べる事にしましよう。「赤ちやん」が一番好きなのはどれでしようか。「赤ちやん」が一番好きだと思う玩具を取つて下さい。いい玩具ですね。さあ，次に好きなのはどれでしようか。（五個の選択がなされるまで続ける。）面白いでしよ。では次の絵を「赤ちやん」に見せましよう。

2. 八対の絵： （a）おとぎ話の王様と女王様： ここにおとぎ話に出て来る王様と女王様がいますね。「赤ちやん」もおとぎ話の中の人になれる事にしましようね。どちらの絵の人に，「赤ちやん」はなりたいでしよう。その絵を取つて下さい。 （b）洋服： 此処に洋服の絵があります。どちらも「赤ちやん」の洋服です。どちらが好きでしようか。 （c）飛行機ー裁縫道具： 飛行機があるでしよ。此処にハンカチをつくる道具がありますね。「赤ちやん」は大きくなつたら，飛行機もハンカチもつくる事が出来ますね。大きくなつたら，どちらをつくるでしようか。その方を取つて下さい。 （d）化粧品： 二枚の絵があります。どちらも顔を綺麗にするのに使いますね。「赤ちやん」が大きくなつた事にして遊びましよう。大きくなつた時どちらを使うと思いますか。その方を「赤ちやん」にあげて下さい。 （e）機械道具ー家事道具： ここに洗濯する時の道具やアイロンがあります。こつちは機械を直す時の道具です。「赤ちやん」が大きくなつたら，二つとも「赤ちやん」のものになる事にしましようね。大きくなつて，どちらを使つて仕事をしたいと云うと思いますか。 （f）靴： 靴の絵がありますね。「赤ちやん」は大きくなつて，どちらの靴を好きと云うでしようか。 （g）遊んでいる子供： 男の子が遊んでいますね。何をしていますか。女の子がままごとしていますね。「赤ちやん」も仲間に入つて遊ぶことにしましよう。「赤ちやん」はどちらの方に仲間入りしたいと云うでしようか。そちらの方を取つて下さい。 （h）台所道具ー大工道具： 「赤ちやん」は大きくなつて，御飯をたいたり，野菜を切つたり，台所で仕事が出来るでしよ。又「赤ちやん」は机を造つたりする事も出来ますね。大きくなつて，どちらの仕事が好きだと云うでしよう。

3. 四人の子供の絵： 四人の子供の絵がありますね。「赤ちやん」は大きくなつた

ら，どの絵の子供にもなれる事にして遊びましよう。「赤ちやん」は大きくなつたらどんな子供になりたいというでしよう。その絵をとつて下さい。

なお，「幼児用 M-F 尺度」を施行する場合，時間に制限は無い。

検査が終つて，前述の採点法にしたがつて，各被験者の性度が計算された。

5 結果と考察

5.1 両性のグループとしての性役割選択の型：

此の研究は Gesel (11, 12) 等の報告にもとずき，沖縄の6才児には，男の子と女の子を集団として比較すると，著しい差を示す選択の型が見られるであろう，という想定のもとに始められている。そこで「幼児用 M-F 尺度」による測定結果に，両性群の差が認められるという事になる。前章で述べた採点法にしたがつて行われた選択反応の得点は，

Table 1

GROUP SCORES, VARIABILITY, AND DIFFERENCES ON THE M-F SCALE

	N	Q1	Q3	Mdn	Mean	CR	SD	F
Boys	53	31.9	47.8	42.25	41.04	17.31*	9.52	1.12**
girls	54	1.3	11.0	5.63	8.33		10.07	

* Significant beyonh the .001 level.

** Not significant on the .05 level.

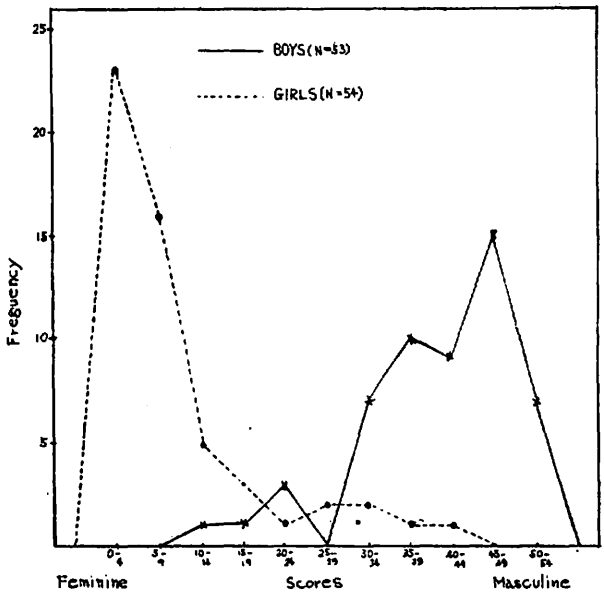

Fig. 1. Distribution of scores on the M-F Scale for Children (Total sample)

男子群では，12点より54点（非常に男性的得点）までの分布範囲が見られ，女子群では，0点（非常に女性的得点）より42点までの分布範囲が見られた。Table 1 および Fig 1 は，両集団に著しい有異差があることを示している。Fig 1 は，沖縄の幼児に，二分化された性役割選択の型のある事を示している。男子群も女子群もともに，右側及び左側に歪みをつけた分布をとつているので，両集団の中心的傾向を算術平均値で表わす事には，難点があろう。然し，平均値の差 32.1，中間数の差 36.62は，ともに .001 以上の水準で有意である。現実の幼児が，性役割について，絶体的男性と絶対的女性との間に種々の中間段階として存在するとすれば，当然のことであるが両集団の性度の出現度数分布の重複が予想される。この事は Fig 1 で明瞭り認められる。然しながら，男子群 $Q_1=31.9$，女子群 $Q_3=11.0$ の間に差が認められる所からして両群の分布の重複が極めて僅かなものである事が分る。註10)　換言すれば，両群の分布に重複は認められるが，男子群は一般に「非常に男性的」極に片寄つて分布し，女子群は一般に「非常に女性的」極に片寄つて分布している。

男子群と女子群の選択傾向の変異性に関しては，両群の全範囲はともに43であり，両群ともに可成りの変異性を示す。標準偏差は，男子群 9.52 女子群 10.07 が得られ，05 の水準で両者に有意差は認められない。然し，男子群の中央50%の者は 31.9点より 47.8点の間に分布しているのに比して，女子群の中央50%の者は1.3点より 11.0点の間に分布している事からして，女子群の性役割選択型は男子群のそれよりも同質的であると云えよう。

5.1.1　混同した性役割の型——Fig 1 によれば，性役割を定義ずける「M—項目」「F—項目」を混合させて選択する傾向を示す子供が両群にいる事が表わされている。即ち，男子群では39%，女子群では19%の者が「幼児用 M・F 尺度」の中間得点（27点），あるいはそれに近似の得点を取つている。この出現傾向に見られる両群の有意差を吟味するため，性と混合選択の独立関係を検定する方法により次の結果が得られた。

$x^2=5.19$　　$df=1$　　$x^2.975=5.02$

したがつて，両性役割に混合して選択反応する傾向の出現には，まず男女両群に有意差が認められる。ただ本研究における標本抽出の際に，両性群の幼児の知能，家族構造，きょうだいの数と性，等の要因に関す等質化が考慮に入れられていない故，この有意差の結果を直ちに一般的傾向と看做す事は妥当でないかも知れない。

男の子と女の子の解剖学的差意にもとづく Freud の論，文化的・社会的に男性が優勢であるという Adler の論からすれば，直ちに「一般に女の子は女性役割を受容れるのに，普通の男の子が男性役割を受容れる場合に比較して，より大きな葛藤を経験するであろう。そこで，混同した性役割選択の型は女の子の方に男の子よりも多く認められるであろう」と仮説することが出来るが，筆者の調査の結果は，二者の論と逆の方向となつている。一般に "父系制" の社会に於いては，種々の特権が男性役割に附加されているため，

註10) Brown の研究にておいては，男子群 $Q_1=56.29$ は女子群 $Q_3=55.50$ 殆んど等しく，両群の分布の重複が著しい。

女性に男性役割に対する羨望を起させ，その結果として，女性に混同した役割選択が認められる，とされる。此の調査の結果は，"父系制" の文化では女の子は男性役割を選択する傾向が見られる，という仮説は常に妥当でない事を暗示していると云えよう。

男・女両群に，両性役割に対して混同した選択傾を示す子供のいる事が見られたが，この事は既述の Mowrer の仮説「幼児期の初期，それ以後における両性役割に対する継続的，混同した同一化と学習が，成人期に見られる不適応の源泉である」と関連して，興味ある今後の研究問題と含んでいる。此処で問題になるのは，性役割選択の型に広い意味でのホメオスタシスの原理が認められるかという事，換言すれば，6才時に両性役割に混同した選択型を示す幼児は，同じ傾向を引続いて学童期・青年期に於いても発達させるであろうか，あるいは，この傾向は此の時期の特徴的傾向であろうか，という事柄である。Mowrer の仮説を検定する意味ばかりでなく，人格発達と適応の問題を究明する意味でも，此の点に関する研究，理想的には縦断的研究，が要求される。

混同した性役割発達と適応の問題についての Mowrer の仮説に反対する見解として，Seward 註11) のものがある。彼によると，或る文化において女性役割が流動的状態にあり，明確に定義ずけられていた過去より役割の性格に急激な変化が見られるとすれば，女の子の性役割の選択の型が混同したものになるのは当然であろう，というのである。更に，女性役割の格がそのような性格であれば，女の子が性役割獲得の過程で葛藤を経験するのは不可避であり，若し，不可避であれば幼児期において確固とした性役割を学習するより，混同して性役割に同一化する方が，後の葛藤経験を小にするであろう，と述べている。沖縄に於いても，過去の女性役割より現代の女性役割が次第に柔軟的傾向にあるとすれば，あるいは「家庭か職業か」の二者択一，あるいは両者の成立か，等の問題がより多くの女性に今後問題となるとすれば，Seward の意見に関する検定も重要な興味のある問題である。より具体的に云うなら，本研究の女子被験者の半分以上が「非常に女性的」傾向を示しているが，彼等と，混同した性役割選択を示した女子被験者の青年期，それ以後の適応問題の比較研究も重要な領域である。

男の子に混同した性役割選択型が，女の子よりも多く見られた事は，筆者の予見した事に一致する。此の事に関して，plausible な説明を加えておく。 Stoke (29) は幼児の「ままごと遊び」を観察して，男の子は女の子程 "行動的同一化" (behavioral identification) を適正役割についてしていないようであるとし，その理由として，幼児の同一化する対象との接触の程度をあげている。筆者の研究の被験者となつた男の子達の父親で家庭内で職業を持つ者は，13%と報告されている。此れに対して，女の子達の母親で専ら家事に従事している者は，78%と報告されている。筆者は，幼児期の性役割同一化の条件として，親子関係の量的面を質的面（情緒的関係）より重視する訳ではない。然しながら，女の子が母親に同一化を試みている間，多くの男の子達も同様に，父親に接する機会よりも母親に接する機会が多いという事が筆者の得た結果を部分的に説明するものと考えられる。Sears 註12) によれば，文化的に男性の地位に利点があり恵まれているとしても，

註11) Brown(4)の論文より引用。

註12) 前述の，シンポージアムで発表された Brown の論文より引用。

母親に対する最初の同一化と愛着から離れて，男の子が父親に対する同一化えと移らねばならない事実は，同一化の過程において女の子が経験しない困難を，男の子に経験させる原因となる，とする。そこで，Sears は，六才の女の子が母親に対して同一化が成立していると同程度に，六才の男の子が父親に対して同一化が成立しているとは考えられない，と報告している。科学的調査書にもとずくのではないが，本研究の被験者達は，家庭において，特に一方の性が他より優遇されるという経験をする事なく育てられている事が報告されている。この事は Adler のいう "男性的反抗" が女の子に起る事を小にすると想定させるし，Brown (4) の云う，女の子の性役割同一化と選択にはずれがある事実を規定する文化的要因を小にする事にもなる。女の子の性役割同一化と選択に一致が想定されることと，Sears の見解が，更に，此の調査の結果を説明するように思われる。この plausible な説明は今後の研究において，種々の要因を統制して，要因間の相互作用を検定する事により，証左されなければ充分な説明とはならない性格のものである事を筆者は認める。

5.1.2 男の子と女の子の適正役割選択の比較　Mowrer (23) は，性役割学習について，正常な成人は幼児期において，社会的に定義ずけられた適正な性役割を学習している，と仮説ずけている。Fig 1 によれば，「幼児M-F 用尺度」をもとにして，六才児では此の点にに関して女の子の方が男の子よりも勝れている事が認められる。男の子については，ほぼ42%のものが明らかに男性役割選択を示しているが，女の子の場合には72%以上のものが，女性役割選択を示している。この両群間の差は，.025の水準で有意である事が認められる。此の点に関する男女間の差は，男の子の「非常に男性的」得点からの平均値の脱逸度 (12.96) と，女の子の「非常に女性的」得点からの平均値の脱逸度 (8.33) の差によつても認められる。この結果は，ペニス羨望の Freud の意見とも，Adler のいう "男性的反抗" の論とも一致しない。女の子の殆んど全部が女性役割選択を示した事は，女性役割に対する誇りと満足からか，あるいは，幼児期においてすでに「女性であること」に対するあきらめがあるためかは，此の調査では明らかではない。

5.1.3 性役割倒錯 —— Fig 1 によれば，極度に異性役割に対する選択傾向を示す子供は，両性群に各々一人しかいない。幼児期に認められる性役割倒錯が，成人期に見られる男性の受動的，女性の能動的ホモセクシュアリテイの源泉である事が，精神分析派及び人格心理の理論家達によつて唱えられている (6)。此の仮説と関連して，幼児期に見られる性役割倒錯と成人期の適応は重要な問題となる。今後の研究調査によつて，性役割選択にホメオスタシスの原理が認められるとすれば，幼児期の性役割選択の型に関する資料は，ホモセクシュアリテイの問題領域において予見的価値を持つようになる。

5.2 「幼児用 M-F 尺度」の項目分析：

六才児に見られる性役割選択の性差を明らかにするために，「幼児用 M-F 尺度」の項目分析を行つた。

5.2.1 玩具の部 ——「幼児用 M-F 尺度」を構成する際に，普通男の子と女の子に

関係ずけられている玩具は，性役割選択に見られる性差を規定するであろう，との想定が用いられている。男の子が男性役割を，そして女の子が女性役割を選択する程度に，性役割に関係ずけられている玩具に対する，子供の選択に性差が見られるであろう。Table 2 は，玩具の部の項目分析の結果を表わすか，上述の事が証左されている事は明かである。最初の５個は「男性玩具，（M—玩具）と看做されるものであり，次の５個は「女性玩具」（F—玩具）と看做されるものである。M—玩具に対する男の子の選選択百分率は，女の子のそれより大であり，F—玩具に対する女の子の選択率は，男の子のそれよりも大

Table 2

RANK ORDERS, PERCENTAGES, AND DIFFERENCES OF CHOICES OF BOYS AND GIRLS ON THE TOY PICTURES SECTION OF THE M-F SCALE

Toy item	Boys' rank	Girls' rank	Boys' %	Girls' %	Chi square	Level of confidence
Soldier	4	8	66	24	19.15	Beyond .001
Pistol	1	10	79	19	41.15	Beyond .001
Earthmover	3	8	74	24	26.76	Beyond .001
Trainengine	2	7	77	28	30.32	Beyond .001
Truck	4	6	66	29	16.29	Beyond .001
Doll	7	1	36	92	32.24	Beyond .001
Necklace	10	5	9	52	23.33	Beyond .001
Dishes	9	3	23	72	25.75	Beyond .001
Red bag	8	4	24	70	23.79	Beyond .001
Pinkish poppy	6	2	43	79	13.13	Beyond .001
Total choices of male toys			73	26		
Total choices of female toys			27	74		

である事は一貫して表わされている。

各幼児に５個の玩具を選択する事が要求されている故，10個の玩具の選択率も最も多いものより５位では，男の子の場合には全て M—玩具であり，女の子の場合には全て F- 玩具が含まれるであろう，という事が予想される。本調査においては，結果は予想と同一方向になつている。この結果は，「幼児用 M-F 尺度」全体について見られた男女両群間の役割選択型の差を示す，Fig 1 と一致する。

Fig 1 を説明するものとして，男の子の M- 玩具選択総数と，女の子の F- 玩具選択の総数の比較が考えられる。男の子の総選択の７３%は M- 玩具であり，女の子の総選択の７４%は F- 玩具である。両群のこの選択数の間には有意差が認められない。男子群

に見られる混同した選択型と，女子群に見られるそれとの間に有意差の認められた事実に及ぼす，玩具項目の影響はあまりないと云えよう。

男の子の選択順位1位は「ピストル」で，女の子の選択順位1位は「人形」となつているが，この事は Brown (4) の調査と一致するのは面白い。更に，この結果は，Gesel (11) の6才児の遊びについての観察結果とも一致する。男の子は敵をうつ事，物かげにかくれる事が典型的な6才児の遊びであり，女の子は，「好きな遊びは」と問われれば，「人形あそび」と答えるであろう，と Gesel は述べている。

5.2.2 八対の絵——「玩具の部」に対する選択反応は，性役割選択の型を定義ずけられる根拠の一つであろう。然し，幼児期に認められる性役割に加えて，成人の性役割で「男性的」「女性的」事柄に直接関係のあるものを対にして，「幼児用 M-F 尺度」の一部を構成すれば，性役割選択の問題に関する更に妥当な評価が可能に思われる。此の意味で「八対の絵」の部が尺度に含まれている。Table 3 は，此の部に対する両性群の選択の結果を表わしており，男女両群の選択傾向に .001 以上の水準で有意差のある事が，

TABLE 3

PERCENTAGES AND DIFFERENCES OF CHOICES OF BOYS AND GIRLS ON THE EIGHT PAIRAD SECTION OF THE F-M SCALE FOR CHILDREN.

	Male choice %	Female choice %	Male choice %	Female choice %	Chi square	Level of confidence
King Queen	68	32	30	70	15.48	Beyond .001
Trousers and shirt Dress	85	15	13	87	55.49	Beyond .001
Sewing materials Airplane parts	66	34	17	83	26.45	Beyond .001
Cosmetic articles Shaving articles	75	25	11	89	44.70	Beyond .001
Mechanical tools Household objects	62	38	21	79	18.52	Beyond .001
Mens' shoes Women's shoes	75	25	49	65	56.42	Beyond .001
Girls playing Boys playing	83	17	79	36	62.42	Beyond .001
Building tools Baking articles	79	21	11	89	49.97	Beyond .001
Totals: eight paired items	74	26	84	16		

各対について認められる。M- 選択肢を選んだ男の数の範囲は，「機械道具と洗濯道具」の項目の６２％より，「洋服」の項目の８５％までの範囲を示している。一方，F- 選択肢を選んだ女の子の数の範囲は，「王様と王女」の項目の７０％より，「靴」の項目の９６％までの変異を示している。「男の子の遊んでいる絵と女の子の遊んでいる絵」の対は，項目それ自体丈でも，"遊び仲間の性" に関する研究と関連させて考察すれば，興味のある問題である。幼児期においては，性による遊び仲間の選択は不明瞭であると一般に云われているが，Hurlock (17) は，幼児童にも同性の遊び仲間を選ぶ傾向のある事を報告している。本研究においては，女の子の方が（９３％）男の子よりも（８３％）同性を選ぶ傾向が大である事が示されている。もつとも此の差は有意でない。異性を遊び仲間として幼児期に選択する傾向と，異性役割選択傾向とに相関が見られる事が報告されているが，此の点を検定する意味で，此の項目が「M-F尺度」に含まれている意義があると筆者は考える。

「裁縫道具一飛行機の部分品」「機械道具と洗濯道具」の二項目における M- 選択肢に対する男の子の反応数は，比較的に小である。此の点に関する妥当な説明は，今後の各年令における性役割発達の横断的研究を俟たねばならないが，筆者の感ずる事は，六才の男の子は同年令の女の子よりも，適正な性役割に対する同一化が難しいのではないか，という事である。

第二部全体については，男の子の M- 選択肢に対する選択率は７４％であるのに対して，女の子の F- 選択肢に対する選択率は８４％である。この差は，.25 の水準で有意であるが .10の水準で有意差は認められない。この差は標本の大きさも考慮に入れる時，標本誤差に帰する事もできるが，同種の調査をより大きい標本について行う時，再びこの差が見られる事を筆者は予見する。此処で見られた差は，混同した性役割選択について男女間に差の見られた事を，説明すると考えられる。

5.2.3 四人の子供の部――「幼児用 M-F 尺度」の最後の部は，「四人の子供の絵」により構成されている。被験者は，「赤ちやん」が大きくなつた時になりたいタイプの子供の絵に，反応する事が要求されている。子供がこの項目に示す反応は，子供の望む

TABLE 4

PERCENTAGES AND DIFFERENCES OF CHOICES OF BOYS AND GIRLS ON THE FOUR CHILD GIGURES SECTION OF THE M-F SCALE FOR CHILDREN

Child figure	Boys' %	Girls' %
Girls	9	90
Mix	9	3
Boy	81	7

性役割のみならず，子供の好む性自体おも暗示するものと想定される。此の意味で，此の項目は性役割の問題を最も直截に取扱つていると考える。即ち，子供は性役割に関連する仕事，道具に対する選択を指示する丈でなく，「赤ちやん」に自己の望む性を投影しているのである。

「若し赤ちやんがどんな子供にでもなれるとしたら，男の子供になりたい」とする男の子は８１％で，「女の子供になりたい」とする女の子は９０％である。この反応型と性との関連は，.００１の水準で認められる。沖縄の六才児では，自分と同じ性を選びそれに満足している傾向が一般的である事が，以上より認められるが，この事を規定する文化的要因，特に家庭における育児法の影響について，今後の調査で究明する必要がある。

「Mix」は「男のような服装をしている女の子」「女のような服装をしている男の子」の絵より構成されている。女の子が男のような服装をする，例えばブルージーンをはく事等，は或程度社会的に許されている。しかし，この逆の事は云えない。そこで筆者は，調査に先だち「Mix」の項に対する女の子の選択数は，男の子のそれより大となる事を予見したが結果は予見に一致しない。わずかではあるが、Table 4 によれば，被験者中で異性の子供を選択した者は，男の子で９％，女の子で７％いる。

5.2.4 「赤ちやん」に与えられる性——「赤ちやん」と呼ばれる性別の不明瞭な人形を用いる事により，「幼児用 M-F 尺度」に対する反応は行われている。謂所の「男性的」「女性的」特徴を持たない人物を併用する事が「 M-F 尺度」の目的である。そこで被験者の知覚する人形の性は，刺戟自体に支配されているというより，知覚者の欲求に支配されていると考えられる。此処における想定は，幼児の「赤ちやん」の性についての知覚は，彼等の自我像 (Self-image) により規定される傾向があり，此の意味で幼児自体に実際にある性役割の要素を人形に与えるであろう，という事である。

各被験者は，測定の終りに「このお人形さんを本当の赤ちやんとしましようね。赤ちやんは名前がいるでしよう。何かいい名前を考えて下さい。」と試験者に問われる。Table 5 が示すように，８０％の男の子は人形に男の名前を与え，８９％の女の子は女の名前を与

TABLE 5

DIFFERENCES BETWEEN BOYS AND GIRLS IN THE SEX OF NAME GIVEN TO THE DOLL

	Boys' %	Girls' %
Male Name	80	11
Female name	20	89

えている。両性群ともに，殆んどの被験者が自己の性を「赤ちやん」に投影している事が認められる。然し，両群を比較する時，人形に女の名前を与えた女の子の数は，男の名を与えた男の子の数より多い。この傾向は「M-F 尺度」全体の得点に見られる両群の差を裏ずけるように思われる。

此の事と関連して，人形を自己と同性に知覚した幼児と，異性として知覚した幼児に見られる「M-F 尺度」の得点差の問題が考えられる。妥当な予見は，男の子で人形を「男

TABLE 6

DIFFERENCES BETWEEN MEAN SCORES ON THE M-F SCALE FOR CHILDREN OF BOYS WHO GIVE A MALE OR A FEMALE NAME TO THE DOLL

	N	Mean	SD	CR	
Male name	42	43.10	7.27	2.34	.025>P>.010
Female name	11	33.18	12.22		

TABLE 7

DIFFERENCES BETWEEN MEAN SCORES ON THE M-F SCALE FOR CHILDREN OF GIRLS WHO GAVE A MALE OR A FEMALE NAME TO THE DOLL

	N	Mean	SD	CR	
Male name	6	21.00	14.43	2.37	.025>P>.010
Female name	48	6.75	7.94		

の赤ちやん」と知覚したものは，「女の赤ちやん」と知覚した者よりも，より「男性的得点」を取るであろう，という事である。女の子の場合では，人形を「女の赤ちやん」と知覚した者は，「男の赤ちやん」と知覚した子供よりも，より「女性的得点」を示すであろう，と考えられる。この事は，Table 6, Table 7, で示されるように，男子群では１０点の平均値差があり，女子群では１４点の平均値差があり，その差はともに有意である事により証左されている。

5.3 今後の研究について

沖縄の幼児に見られる性役割選択の性格,型を量的に表わす目的で，Brown の ''ITSC'' の原理にもとずいて「幼児用 M-F 尺度」が構成された。本研究を通じて，この尺度が性役割発達と適応の分野における，妥当なそして有効な測定道具であると筆者は考える。次の調査の段階として要求される事は， Mowrer 等の仮説を検証する資料を集積して行く他に，本調査で見られた結果を説明するために挙げられた諸要因の，性役割選択の型にはたして影響があるか，を検証する事である。更に，此の論文で試みられていないが，幼児の性役割選択型に見られる地域差，兄弟姉妹の有無と性役割発達の関係も興味のある重要な問題である。此等の調査領域で，「幼児用 M-F尺度」は有効な測定道具となると思う。

6 要　　約

性役割行動と人格適応の問題における，諸仮説を検定する目的で此の研究は始められた。その第一段階としての本調査は，(1)性役割選択を量的に表現する尺度の構成を試みる事と，(2)沖縄の6才児に見られる性役割選択の性差，および，性差を規定する諸要因を究明する，事を主要関心事として来た。本論文において，"性役割選択"の概念は，性別に類型化された事物，人，活動，等に対する幼児の間接的反応，と操作的に定義ずけられた。

那覇市城西幼稚園の男の子53人，女の子54人，平均年令6才5カ月，が標本として選ばれた。性役割選択の傾向を，量的に表現するために，Brown の ''ITSC'' の原理にもとずいて，沖縄の幼児に適用され得る「M-F 尺度」を，筆者は構成した。尺度は30枚の6.5×9（インチ）の図版で構成され，各図版には「男性的」「女性的」役割に関連ずけらている，玩具，活動，道具等が画かれている。幼児の性役割に対する同一化，および選択を投影法により把える目的で，性別に関しては比較的不明瞭な，「赤ちやん」と呼ばれる人形が併用された。被験者は，この「赤ちやん」のために選択するよう要求される。一カ月の期間をおいて得た，「M-F 尺度」のテスト—再テスト法による法による信頼度は，.91であつた。本調査における考察の資料は，この「M-F尺度」の測定結果によるものである。なお，筆者は性役割発達に関する諸研究を検討し，本研究の被験者の性役割選択傾向について次の二つの仮説をたてた。

1　男の子と女の子をグループとして比較する時，性役割選択傾向に著しい二分化が認められる。

2　男の子と女の子を比較する時，混同した性役割選択は男の子に多く見られる。

第一の仮説については，.001の有意水準で差が認められ，第二の仮説については，.025の有意水準で差が認められた。

主な結果は次の通りである。(1)男女間に，有意差の認められる平均値差，中間数差が得られた。6才児に明瞭りした，比較的二分化された性役割選択の型のある事が暗示された。(2)男の子の選択型は女の子のそれよりも異質的である。然し，「男性的得点」の方向に歪みを見せる得点分布を示している。(3)男女の選択の型にわずかの重複が見られた。(4)混同した性役割選択の型は男子群に多く見られた。此の結果は，Freud の論とも，Adler の論とも逆の方向である。(5)沖縄の幼児に性役割倒錯者は殆んど見られない。(6)玩具の部については，各項目について男女の選択率に有意差が見られた。男の子の総選択の73%はM－玩具であり，女の子の選択の74%はF－玩具であつた。八対の絵の部に於て，M－選択肢を選んだ男の子の数は62%－85%，F－選択肢を選んだ女の子の数は70%－96%となつておる。適正な性役割を反映する選択肢を選ぶ傾向は，女の子にわずかに多く見られた。更に，第三部において，同性の子供を選んだ女の子は90%で，男の子では81%の者が同性の子供を選んでいた。(7)自己の性を「赤ちやん」に投影した男の子は80%で，女の子では89%であつた。

以上の結果に対する考察は，幼児期の性役割選択と成人期の適応，性役割発達に見られる性差，性差を規定する要因，性役割倒錯，等の面よりなされた。

引　用　文　献

1. Adler, Alfred. Menschenkenntnis. Leipzig, 1931. 山下 肇訳 現代人の心理構造 日本教文社, 1957
2. Anastasi, Anne, & Foley, J. P., Jr. Differential paychology. (Rev. Ed.) Neu York: Macmillan, 1949.
3. Back. E. G., Father-fantasie and father-typing in father-sepaerated children. Readings in child development, Edited by Martin W. E. & Stendler, C. B., New York: Harcourt, 1954 p. 368-379.
4. Brown, D. G., Sex-role preference in young children. Psychol. Mogogr., 1956, 70, No. 14 (Whole No. 421).
5. Brown, D. G., Masculinity-femininity development in children. J. Consult. Psychol., 1957, 21, 197-202.
6. Brown, D. G., The development of sex-role inversion and homosexuality. J. Pedia., 1957, 50, 613-619.
7. Freud, S., Leonardo Da Vinci, A study in psychosexuality. New York: Random House, 1947.
8. Freud, S., Neue Folge der Vorlesungen zur Einfuhrung in die Psychoanalyse. 古沢平作訳 続精神分析入門 日本教文社, 1954
9. Freud, S., 懸田克躬訳 性　欲　論 日本教文社, 1955
10. Frank, L. K., The fundamental needs of the child. Mental Hygiene, 1938, 22, 353-379.
11. Gesell, A., The child from five to ten. New York: Harper, 1946.
12. Gesell, A., The first five years of life: A guide to the study of the preschool child. New York: Harper, 1940.
13. Goodenough, Evelyn W., Interest in persons as an aspect of sex differences in the early years. Genet. Psychol. Monogr., 1957, 55, 287-323.
14. Gough, H. G. A sociological theory of psychotherapy. Amer. J. Sociol., 1948, 53, 359-366.
15. Gray, Susan W., Masculinity-femininity in relation to anxiety and social acceptance. Child Develop., 1957, 28, 203-213.
16. 堀　要　性差を規定するもの, 青年心理7巻3号, 1956
17. Hurlock Elizabeth B. Developmental psychology. New York: McGraw-Hill, 1953.

18. Klineberg, O., Social psychology. New York, Holt, 1940.
19. Kobasigawa, A., A study of the ideals of the 7th and 8th graders in Okinawa. Unpublished paper, 1955.
20. Mead, Margaret. Sex and temperament in three primitive societies. New York: 1953.
21. Mead, Margaret, Male and female. New York: Morrow, 1949.
22. 三好 稔 差異心理学, 金子書房, 1951
23. Mowrer, O. H., Learning theory and personality dynamics. New York: Ronald, 1950.
24. Newcomb, Theorore M., Social psychology, New York: Dryden Press, 1950.
25. 小保内虎夫・松岡 武 色彩象徴性格検査法 中山書店, 1956
26. 大宮 録郎 地域における男女差, 青年心理 7巻3号, 1956
27. Parsons, T. Age and sex in the sociai structure of the Unlted States. Amer. sociol. Rev., 1942, 7, 604-616.
28. Reed, Max R., The masculinity-femininity dimensions in normal and psychotic subjects. J. abnorm. soc. Psychol., 1957, 55, 289-294.
29. Stoke, Stuart M., An inquiry into the concept of identification. J. genet. Psycho l., 1950, 76, 163-189.
30. Terman, L. M., & Miles, Catharine C. Sex and personality. New York: McGrraw-Hill, 1936.
31. Tyler, Leona E. The psychology of human differences. (2nd Ed.) New York: Appleton-Century-Crofts, 1956.
32. 牛島義友 性差の社会的教育的意義, 青年心理 7巻3号, 1956

AN ABSTRACT OF A STUDY ON SEX-ROLE PREFERENCE IN SIX YEAR OLD CHILDREN OF OKINAWA

AKIRA KOBASHIGAWA

The present study was conducted because of the importance for establishing a scale which facilitates the quantification of sex-role preference in children, and for investigating the nature of and sex differences in sex-role preference which might exist in Okinawan children. The concept, "sex-role preference," was operationally defined in terms of the preferential responses of children to sex-typed objects, figures and activites.

One hundred and seven children, 53 boys and 54 girls, ages 5-11 to 6-10 with a mean age of 6-4, who were enrolled at the Josei Kindergarten of Naha, participated as Ss of the present study. To facilitate the quantification of sex-role preference, the writer constructed the musculinity-femininity scale for children by revising the original scale, "It Scale for Children," developed by D. G. Brown. The scale is made up of 30 picture cards, 6.5 by 9, of objects and activities socially defined and identified with the masculine or feminine roles in our culture. The projective element of the scale was a baby-doll referred to as "Akachan," which was used to facilitate the child's expression of his or her own role preference. The doll was relatively ambiguous as to sexual identity. Each S, rather than being asked to choose directly, was asked to make choices for "Akachan." The test-retest reliability of the scale at an interval of one month was .91.

Under the assumption that sex-role preference patterns exist in children and that boys might have more difficulty in learning appropriate sex-roles than girls, the writer hypothesized that

1. There is a significant mean difference indicating that boys score more masculine and girls more feminine.
2. There are more ambivalent role preferences among boys than girls.

Both hypotheses were accepted. Main findings of the study were as follows:

(1) significant mean and median differences between boys and girls were found, indicating the existence of dichotomous sex-role preference pattersns in children of six years old. (2) More boys showed ambivalent sex-role preference, indicating acceptance of components of both the male and female roles. This result was in the opposite direction of Freudian and Adlerian hypotheses. (3) Few children in both groups showed a strong opposite sex-role preference in this study.

All findings and implications of the present study were discussed from the aspects of (1) childhood learning in sex role behavior and adult personality adjustment, (2) plausible factors that might determine sex differences in acceptance of sex-roles, and (3) sex-role inversion.